ナツノヨルノユメ

僕たちの人生は夏の夜の夢の様なものだ
それは情熱的で、
ほがらかで、
楽しく、
そして短い

夜というのは静かであるべきだ。
例えここがいつも自分が過ごす居心地の良い自室ではなく、常にひとの出入りがある騎士団本部であろうと。
階下からの騒ぎ声はようやく収まりつつあるようだ。まったくこの屋敷ときたら、倒壊寸前というだけでは飽き足らず壁まで薄いらしい。スネイプはクロスの剥がれかかった壁を睨みつけた。
スネイプは明朝は誰にも会わずにこの場所を出ようと心に決めた。
きょうは普段に比べて屋敷内に多くの人間がいる。その中にはいまだに自分を疑っている者、意見の合わない者、顔さえ見るのも嫌な者などが含まれている。他人にどう思われようと今さらいちいち気にはしないが、いまは些細な諍いさえ避けなければならない時期だ。自分に諍いの因子があるのなら自ら遠ざけるべきだ。
ではなぜわざわざきょうという日にこの場所に来たのか。理由はひとつだけだ。きょうは、彼の誕生日だったから。
部屋の扉を叩く音がした。
「セブルス。起きてるかい？」
スネイプは答えなかった。再び扉が強く叩かれる。
「起きてるんだろう？開けてくれないか。大変なんだ」
あの男の性格からして、自分が応じるまで決して諦めないだろう。面倒はさっさと終わらせてしてしまうに限る。スネイプはようやく扉を開けてやった。
「ああ、やっぱり起きてたね」
にこりと笑うルーピンと、もうひとり。
「えへへ～」

「ルーピンせんせぇ」と甘い声でルーピンの首に巻きつくように腕を絡めているハリーは今にも喉を鳴らしそうな勢いである。
「言っておくけど、これは僕の所為じゃないよ？」
ルーピンはハリーの肩を抱いて「やれやれ」と呟いてはいたが『困っている』という風には見えない。むしろ愛し子に懐かれて嬉しそうだ。
「……何のつもりだ貴様」
「だから僕の所為じゃないってば。ハリー、ほら。セブルスだよ」
「ふぇ？」
どこか舌足らずな声だった。ハリーは首だけを動かしスネイプを見上げた。そして、
「スネイプせんせ～！」
「な、なんだ！？」
ハリーが突然スネイプに向かって飛び掛ってきた。
「せんせ、せんせ～」
「一体何なのだ、これはっ！」
「いや～やっぱりすごいね～。僕のときとは大違いだ」
能天気なルーピンの声。
「何がだ！」
「僕のときは飛びついてくれたりしなかったよ？羨ましいなぁ」
「わたしが言っているのはそういうことではない！」
「せんせ～」
ハリーはスネイプの胸にしがみつき、頬を摺り寄せていた。

ことの起こりは少し前の時間に遡る。
ハリーの誕生日ということで、この夜はいつもより多くの人間が騎士団本部に集っていた。ハリーはいま、事実上軟禁状態にあった。闇の陣営の襲撃を警戒してハリーの傍には常に誰かが付いてまわった。ハリーと親しいウィーズリー家の者たち、ハーマイオニーも騎士団本部に寝泊りしている。だが彼らの警護はハリーに比べれば緩い。付き添いさえあれば外出くらいはできるのだから。
だがハリーは違う。外出さえ自由にできない。
ハリーは一見元気に振舞ってはいるが精神的にはかなり疲労している。せめて気分が晴れるようにとウィーズリー夫人はハリーの誕生パーティを企画した。

大きなケーキにご馳走に数々。心のこもった贈り物の数々に、ハリーの表情がぱぁっと明るくなった。魔法界の人間ばかりの騎士団メンバーからのプレゼントは普通のプレゼントとは違っていた。だがその中でも飛び抜けて普通ではなかったのが、ウィーズリー家の双子たちからのプレゼントだった。
パーティが終わりにさしかかり、それぞれが自室に戻すためにちらほらと席を立ちはじめた頃。
「ハリー、ちょっと僕らの部屋に来ないか？」
同じ顔がハリーに話しかけてきた。
「夜更かしなんかしてはいけませんよ！」というモリーおばさんの声から逃げるようにふたりの部屋に連れて行かれた。
「ハリーにとっておきのプレゼントがあるんだ！」
ふたりは晴れやかに言い放ち、赤い小瓶を取り出した。
「……なに？これ」
「ふっふっふっ。これぞ、我がWWWが誇る新製品！」
「皆さんに娯楽を提供する使命を担った我々が作り出した、究極の薬！」
「……で、つまり？」
『飲むだけでたちまちあなたもハッピーになれる！』
『ハッピーハッピー薬』だ！」
……ふたりの商品説明には効果音まで聞こえてきそうだ。
『笑い薬』ってこと？」
飲むと笑いが止まらなくなるような。
「チッチッチッ、ハリー。我々がそんな単純なものを商品化すると思うのかい？」
「思わない」
ふたりはいたずらや悪だくみ関しては他の追随を許さない。ハリーが資金提供をした「いたずらグッズ専門店」は順調に売り上げを伸ばしていると聞く。そんなふたりが単なる『笑い薬』をいまさら作るとは思えない。
「これはまさに画期的な商品なんだぜ」
ハリーは再び目の前の小瓶を見た。
「さ、試してみてくれよ！」
「きょうはハリーの誕生日だもんな！うんとハッピーな気分を味わって欲しいんだ！」
「……飲むのは今度にするよ。ほら、きょうはもう遅いし」
ふたりの気持ちは嬉しい。この薬も本当にこころからの好意によるものなんだろう。
だが、はっきり言って、飲みたくない。

ふたりが嫌いな訳ではない。ふたりのこれまでの発明品の数々が頭をよぎる。ふたりはそれはそれは愉快なものを作り出してきた。だが同じくらい、いやそれ以上の失敗品もあったわけで。
だけどふたりは許してくれなかった。
「遠慮なんかするなよ」
「さ、さっ」
ふたりは瓶をハリーの手に握らせた。
ハリーは瓶とふたりの顔を交互に見遣る。多分ふたりは僕がこれを飲むまで解放してくれないだろう。
ふたりがこれほど強く勧めるのも他に理由があるんだろう。――「実際飲んだらどうなるのか、結果が知りたい」という理由が。ハリーは息をついた。
一口くらいなら大丈夫だろう――多分。
ハリーは瓶の封を切り、一口だけ液体を飲んだ。

「あの子たちはまだ起きているのね」
階上からバタバタという音がキッチンに響いてきた。
モリーは「まったくもう」呆れ、濡れた手を拭うと階上の部屋に向かおうとする。そんなモリーを押し留めたのはルーピンだった。
「いいよ。わたしが行ってくるから」
「まあそう？きつく叱ってやってちょうだいな」
ルーピンは「わかってるよ」と返した。
しかしモリーには悪いが、ルーピンはあまりきつく怒鳴りつけるつもりはなかった。友人同士が集えば夜更かししてはしゃぎたいものだというのをルーピンはよく知っていた。それにモリーの名を出せば彼らは大抵おとなしくなる。モリーは優しいが、とても厳しい。誰も彼女に逆らえない。
ルーピンは扉を叩いた。
「いい加減にもう寝なさい。モリーが下で怒っているよ」
部屋の中からガタガタと音が聞こえる。確かこの部屋は双子の部屋だったはずだ。また何か実験でもしているのだろうか。
「うわぁ！」
双子の（どちらかまでは不明だが）叫ぶ声が聞こえた。
「何をやってるんだ？」
もしかして危ない実験でもしていて失敗したのだろうか。心配になったルーピンは扉を開けた。

「一体何をして……」
部屋の中にはフレッドとジョージがいた。フレッドは何故か床に仰向けに倒れている。何があったのか問おうとして、ルーピンはその横で繰り広げられている光景に目を丸くした。
フレッドの隣にはジョージがいた。彼も同様に床に倒れている。そして彼は――ハリーのキスを受けている真っ最中だったのだ。
ルーピンが真っ先に思ったのは「どうしてハリーのほうからキスしているのか？」ということだった。フレッドとジョージはハリーが好きだった。思春期にありがちな事とはいえ、あれほど同性への思慕を隠さずに振舞う子たちは珍しい。ふざけて「ふたりからハリーにキスを迫る」という場面は今までに何度かお目にかかっていたが、その逆はなかった。というより、ありえないと思っていた。
ハリーが自ら「キスしたい」と望む相手はただひとりだけだったから。
とりあえず引き離したほうがいいだろう、とルーピンはハリーの身体をジョージから離してやる。
「……あ？」
ハリーはぽかんとした表情でルーピンに振り返った。
ルーピンが「どうしたの」と問おうとするより早く、言おうとした言葉はハリーによって塞がれてしまった。
強引に押し付けられる唇と、自分の唇を抉じ開けようとする舌。驚きのせいもあってハリーの舌は難なくルーピンの舌を捉え絡み付いてきた。
目の前のハリーは目を閉じ、熱心にキスに没頭している。ルーピンは肩越しにふたりの様子を眺めてみる。
先程までハリーのキスを受けていたジョージはフレッドと同様に床に転がっている。ハリーのキスにあてられたというところか。
双子もそれなりに女の子とも付き合っているはずだ。キスの経験も何度かはあると思うが、ハリーからの、この濃厚で熱烈なキスというのは初めての経験だったのだろう。ハリーにキスされたという事だけで十分な衝撃だろうに。
ハリーはまだ熱心にキスを続けている。どうやら正気ではないらしい、とルーピンはハリーの様子を冷静に観察した。
だがとりあえず、この状態を何とかしなくては。
ルーピンはハリーの肩を掴んで自分から離し(少し惜しい気もしたが)、その身体を片手で支えて立ち上がらせた。ハリーが掴んでいる瓶が目に止まり、ルーピンはそれを取り上げた。
ルーピンは匂いを嗅いたのち、慎重に一滴だけ舐めてみた。
「なんだこれ……」
甘い香料で紛れてはいるが、薬臭さが鼻をつく。おそらくマグル界で流行しているドラッグの類ではないだろうか。
やれやれ、とルーピンは呆れて双子達を軽く睨みつけた。こんなものを薬に混ぜるだなんて。
ルーピンは双子に向かって杖を振った。途端、ふたりは大きないびきをかき始めた。これで朝まで目を覚まさないだろう。
「さて、と」
ルーピンはハリーを片腕に抱き上げた。ハリーは逆らうこともなき、従順にルーピンにしがみついてくる。
「いい子だね。ハリー」

部屋を出たルーピンが向かった先は自分の部屋でもハリーの部屋でもない。スネイプの部屋だった。

「じゃあ後はよろしくね」
「何でそうなるっ！大体何故わたしのところに連れてくるのだ！？」
「仕方ないよ。あのまま双子たちのところに置いておく訳にはいかないし。かといってこのまま部屋に連れて行ってひとりにすれば誰かの部屋に行っちゃうかもしれないしさ。まあこういう薬は効果を発散させれば消えるのも早い。だから君が一番適任っていうこと」
そう言い残し、ひらひらと手を振ってルーピンは部屋から出て行った。
スネイプはルーピンが置いていった件の薬瓶を手に取った。甘い香りは苦味と臭いを消す為に何か香料を混ぜたのだろう。
あの双子が高度な精製を行なえるとは思えない。おそらくそういうふれ込みでハリーに渡したのだろう。
中身は向精神薬などの気分を高揚させるものの類だろうか。暗示にかかりやすくなるような成分も含まれているのかもしれない。
「せんせ」
「何だ」と答えると、ハリーはにこにこして顔を近づけてきた。
「だぁいすき」
ちゅ、と柔らかな唇が触れた。
リーマスの言う通り、確かにこの状態のハリーは一部の人間にとっては大変危険な存在だ。花が蜜の薫りを振りまいているようなものだ。
ハリーは舌を突き出しスネイプの舌を誘っている。その誘いをスネイプが拒む理由はどこにもなかった。
……こうなったらこちらも楽しませてもらう
互いの唾液が絡み合う。ハリーからは甘い香りが漂っていた。蜜を湛えた花のように。夢中でそれを啜る自分は、捕らえられた獲物というところか。
「んうっ……んん」
ハリーは熱心に口づけを続けている。それは初めて見る熱心さだった。
ハリーは何事にも一歩引いているようなところがあり、ベッドの上で我を忘れて乱れるのもそこまでスネイプが促してやってようやく、といった具合だった。もちろんそんな彼も初々しく可愛いと思うわけだが、こういう積極的な彼も悪くない。
唇を離すと唾液の糸が細く伸び、薄い夜着に落ちた。
「やぁ！もっとお」
駄々を捏ねるようにハリーはキスを強請る。
「……キスだけでいいのか」

「やっ！」と、ハリーはスネイプに身体を擦りつける。
「もっと……いろんなこと、したい……」
ハリーはスネイプの頬や首筋にキスを繰り返し、囁く。スネイプはハリーを抱き上げ、ベッドの上に落とした。一瞬でも離れたくないと、ハリーは再びスネイプにしがみついてきた。
「服も脱がないつもりか？」
「ふくなんて、どうでも、いいのぉ」
「わたしは見たいが」
「お前の身体を」と唇に触れるか触れないかの距離で囁いてやる。ハリーはぶるりと震え、夜着の釦を外し始めた。だがその途中で、スネイプはハリーの手を止めさせた。
「なぁに？」
「きょうはお前の誕生日だったな」
「うん」
「ひとつ大人に近づいたわけだ。なら大人らしくあらねばと思わないかね」
「ど……する、のぉ？」
「そうだな」
スネイプはハリーの肩のシャツをぐいと引き下ろした。そのまま細い肩のラインを指で撫でる。
「もっと扇情的に脱いでみたまえ」
ハリーは「う～ん」と考え込み、それからぱっと表情を輝かせた。
「んとぉ、」
ハリーは夜着の裾を足の付け根ギリギリのラインまで捲り、身体を捻り太腿を交差させた。
「こ、ゆうの？」
ハリーは得意満面だった。
「フレッドが見せてくれた写真に、こーゆーのがあって……ロンとかもすご～く興奮してたよ？」
一体どんな写真を見せられたのか。「ホグワーツに戻ったら生徒の持物検査を実施してやる」と怒りを覚えながらも目の前の誘うハリーの姿に衝動を抑えきれなかった。
「せんせ？」
ハリーはスネイプに向かって両手を広げた。
「ん……ふぁ、んん」
片手でハリーの胸を弄りながら舌を絡めてやる。ぴんと尖った先を指で弾くとハリーはびくびくと震え、それが舌先にまで伝わってきた。